



統計から社会の実情を読み取る

第32回 イングルハート価値空間

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団民経研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年) 等。



イングルハート価値空間

説得力ある仮説にもとづき、世界各国で異なる価値観の分布を総括的に2次元マップで表せたらどんなによいかと多くの研究者が考えていると思うが、それにかなり成功しているのが世界価値観調査を主導しているメンバーの一人である米国ミシガン大学のイングルハート教授の研究である。

今回は、この2次元マップを紹介するとともに、日本人の価値観の位置とその変化について見てみよう。

イングルハートらは、経済発展によって文化は同一方向に変化するとしたマルクスやダニエル・ベルと文化的な価値観は各々の社会に固有のものであり続けるとしたマックス・ウェーバーやサミュエル・ハンチングトンのどちらが正しいかを実証的に確かめるべく世界価値観調査の結果を分析した結果、一見、逆説的ではあるが、両方とも正しいとする次のような結論を得たとしている。「経済発展と平行して、絶対的な規範や価値から合理性、寛容、信頼、参加にもとづく価値へとますますシフトする傾向が

あるが、こうした文化的な変化は「経路依存的」(path dependent) である。近代化過程の中でも、プロテスタン、ローマン・カトリック、ギリシャ正教、儒教、共産主義といった大括りで捉えた社会的遺産は、人々の価値観に痕跡を残し続ける。また、同じ国の中で異なった宗教を持った者がもつ価値観の差異は、国別の差異よりもずっと小さい。いったん確立した国ごとの差異は、教育機関やマスメディアによって受け継がれていくのである。我々の結論は、近代化理論を幾つか改訂することになったと考える」(Inglehart and Baker (2000))。

以下、こうした分析の結果を示した2次元マップを紹介する。これらは、「イングルハート・ヴェルツェル図」と呼ばれたり、当人達によって「世界文化マップ」と呼ばれたりしているが、ここでは、国連開発計画のロシアに関する報告書 (UNDP (2011)) が、このマップを “R. Inglehart Value Space” と呼んでロシアの揺れる価値観を分析したのに倣って、「イングルハート価値空間」と呼ぶことにした。

世界各国の価値観分布

イングルハート価値空間は、一時点の配置を示す現状図と各国の複数時点の変化を示す推移図の二つのあらわし方がある。それぞれを順番に見て行こう。

図1のように、世界各国の国民の価値観を、伝統的か合理的かの軸（Y軸）と生存重視（言い換えると物的生活重視）か自己表現重視（言い換えると個性重視）かの軸（X軸）とで分析・整理してみると、見事に、各地域の価値観分布がレイアウトされる。なるべく多くの国を表示するために、通常描かれる1期データ・マップでなく、2期にまたがる新しい方のデータのマップを示した。それぞれの軸の関連設問の例示については表1に示した。

なお、Y軸（伝統←→世俗・合理）は近代化の第一ステップ、すなわち農業社会から工業化社会への工業化プロセスに対応し、X軸（生存←→自己表現）は近代化の第二ステップ、すなわちサービス経済化による脱工業化プロセスに対応する価値軸として捉えられている。実際、工業マイナス農業の就業比率は前者と相関が高いし、サービス業マイナス工業の就業比率は後者と相関が高くなっている（Inglehart and Welzel (2005)）。確かに、おおまかにいえば、左下から右上にかけて、アジア・アフリカからヨーロッパへと経済発展度に沿った国別配置となっている。

イングルハートによれば、第一ステップの工業化は、世俗主義・合理主義と軸を一にしているものの、自己表現の重視とは必ずしもむすびつかず、自由を抑圧する共産主義や開発独裁の下でも十分可能だったのに対して、第二ステップの脱工業化とサービス・セクターの勃興には、高学歴で自律的な労働者の存在が不可欠であり、産業的な理由により、自己表現の優先、

及びそれと整合的な自由主義・民主主義をもたらすことになる（同上）。

東アジアの儒教圏は、Y軸上は世俗的（脱宗教）だが、X軸上は、なお物質主義的な感覚を残しており、同様の価値観を有するロシア・東欧旧共産圏の中に埋め込まれる形の位置にある。民族も歴史も体制も異なるロシアと韓国が価値空間的には極めて近い位置にあるのも興味深い。日本は儒教圏の一角を占めながら、その中では、ヨーロッパの先進国にかなり近い配置となっている。

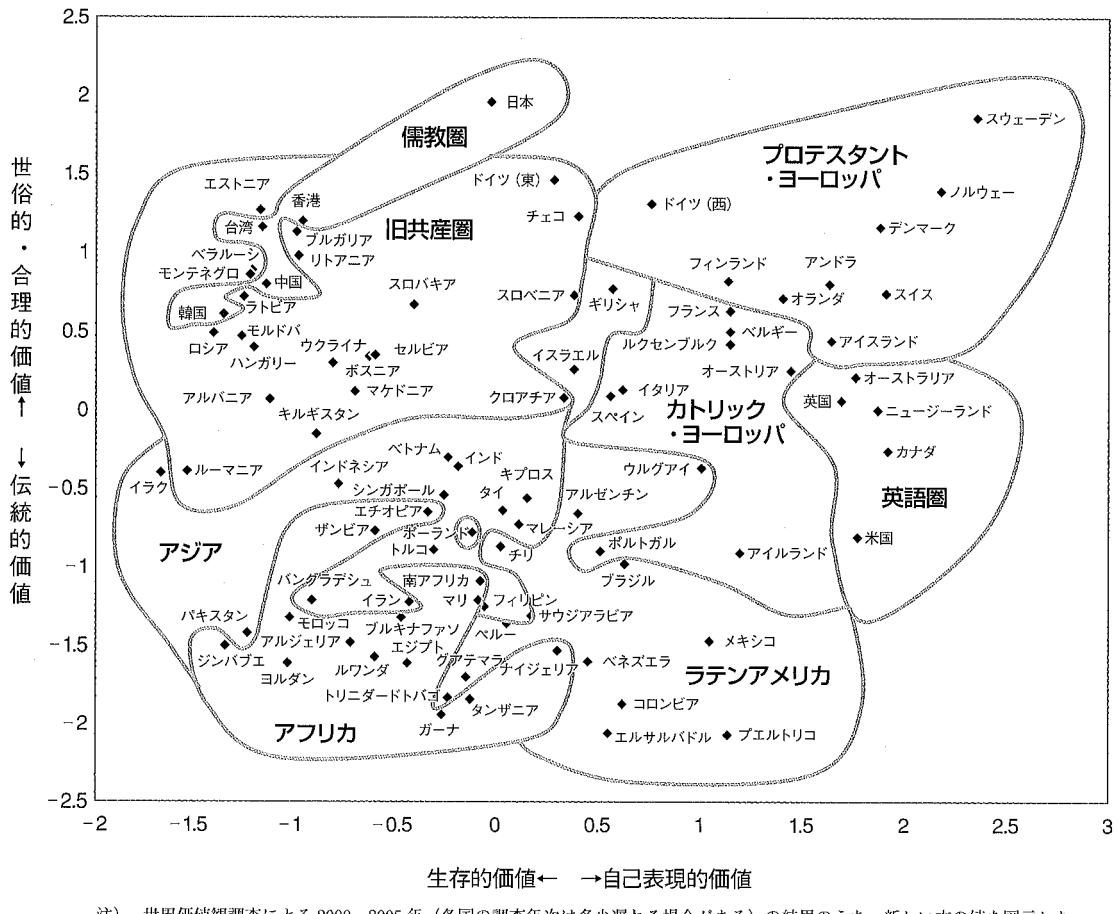
米国は英語圏の下半分の所に位置する。米国は伝統的な価値観を重視しているのである。「文化的な変化を『アメリカ化』と捉えると間違える。産業社会一般は米国のようにはなっていない。実際、米国式生活に対する多くの観察者（Lipset）が論じているように、米国は『逸脱』ケースのように見える。米国人は他の同等に繁栄している社会と比較して、ずっと伝統的な価値観や信仰を有しているのである（Baker）」（Inglehart and Baker (2000)）。

イングルハート価値空間における推移

文化的な変化は「経路依存的」だとされるが、確かに、過去5期（20年ぐらい）の変化を図2で見ると、各主要国は、その国が属する大括りの文化圏グループの分布の範囲の中で推移している。

ヨーロッパ諸国は、おおむね右上への方向を、まず工業化、次に脱工業化と段階的に進展する近代化の王道に沿って進んでいるように見える（ドイツ（西）、オランダのように一時的な後退もあるが）。図上の位置から考えて、すなわち、ヨーロッパ諸国が一般的に向かっている方向の先に位置することから、もっとも「進んでいる」のはスウェーデンのように見える。

図1 イングルハート価値空間における世界各国（91か国）



注) 世界価値観調査による2000、2005年（各國の調査年次は多少遅れる場合がある）の結果のうち、新しい方の値を図示した。
ただし、英國は北アイルランドを除く。また、ドイツ（西）、（東）はそれぞれ旧西独、旧東独地域。

資料) Ronald Inglehart & Chris Welzel, The WVS Cultural Map of the World (WVS HP 2013.8.24)

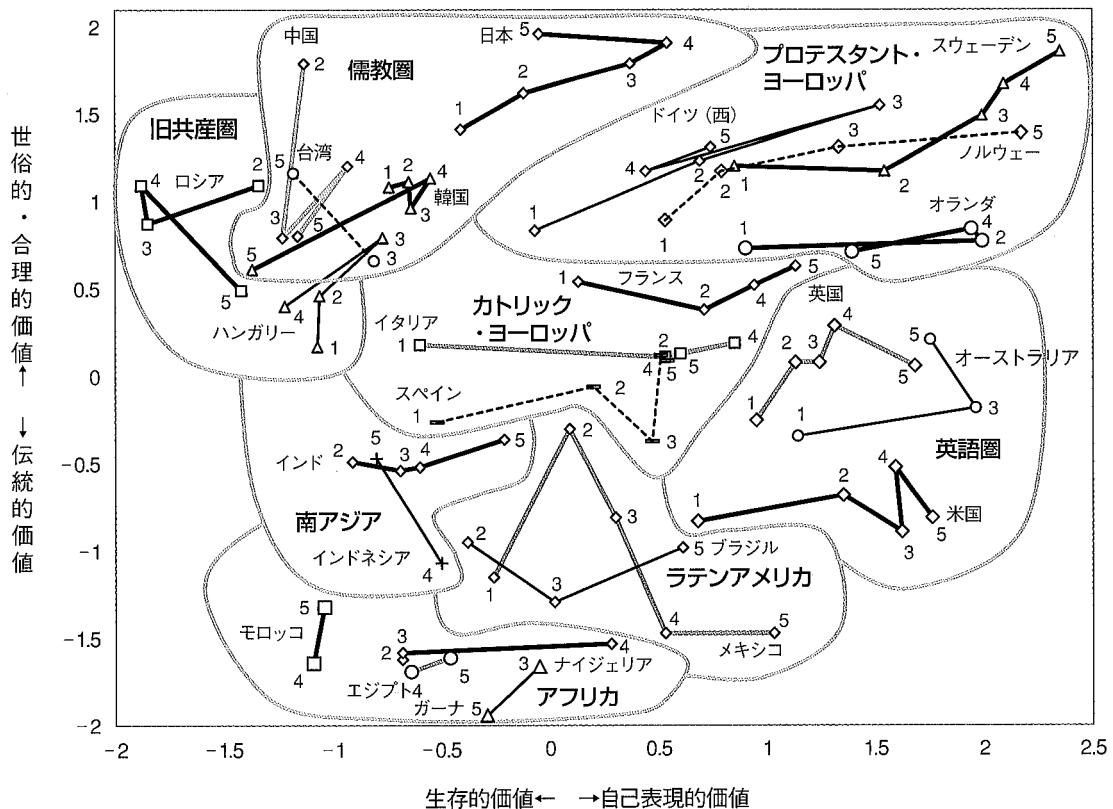
表1 国別のちがいをあらわす二つの次元（集計レベル分析）

伝統的価値（traditional values、第1主成分、図1のY軸）の関連設問	因子負荷量	生存的価値（survival values、第2主成分、図1のX軸）の関連設問	因子負荷量
世俗的・合理的価値（secular and rational values）の逆		自己表現的価値（self-expression values）の逆	
・神は私の人生や暮らしにとって重要である	0.91	・自己表現や生活の質より経済的・物的な生活の充足に優先度をおいている（4設問指標）	0.87
・子どもにとっては、独立心や自ら決めることより信仰心や言うことをきくことの方が大切である	0.88	・余り幸福ではない	0.81
・堕胎は決して正しくない	0.82	・請願書にサインしたことがなく、したいとも思わない	0.77
・自分の国に対して強い誇りをもっている	0.81	・同性愛は決して正しくない	0.74
・国のえらい人に対して尊敬の念をもっている	0.73	・人を信用するのには慎重でなければならない	0.46

注) 第1主成分は国別のちがいを46%説明し、第2主成分は25%説明している。世界価値観調査データ（4期、78国で実施された200以上の調査の結果）による。

資料) Ronald Inglehart and C. Welzel (2005) : p.49

図2 イングルハート価値空間における主要国的位置変化



注) 世界価値観調査による。数字の1から5は、それぞれ1981、1990、1995、2000、2005年（各調査年次は多少遅れる場合がある）の結果であることを指している。ドイツ（西）は西独、あるいは旧西独地域。

資料) Ronald Inglehart & Chris Welzel, The WVS Cultural Map of the World (WVS HP 2013.8.24)

日本は、20世紀の間は、位置の差はあるとはいってもプロテスタント・ヨーロッパの各国と同一の方向へと変化を続けていたが、21世紀に入った2000～05年には、Y軸の世俗的・合理的価値への方向は継続している一方で、X軸では、自己表現的価値よりはむしろ生存的価値の方向に振り戻しが起こっており、ある意味では、アジア回帰が進んでいるのが特徴である。

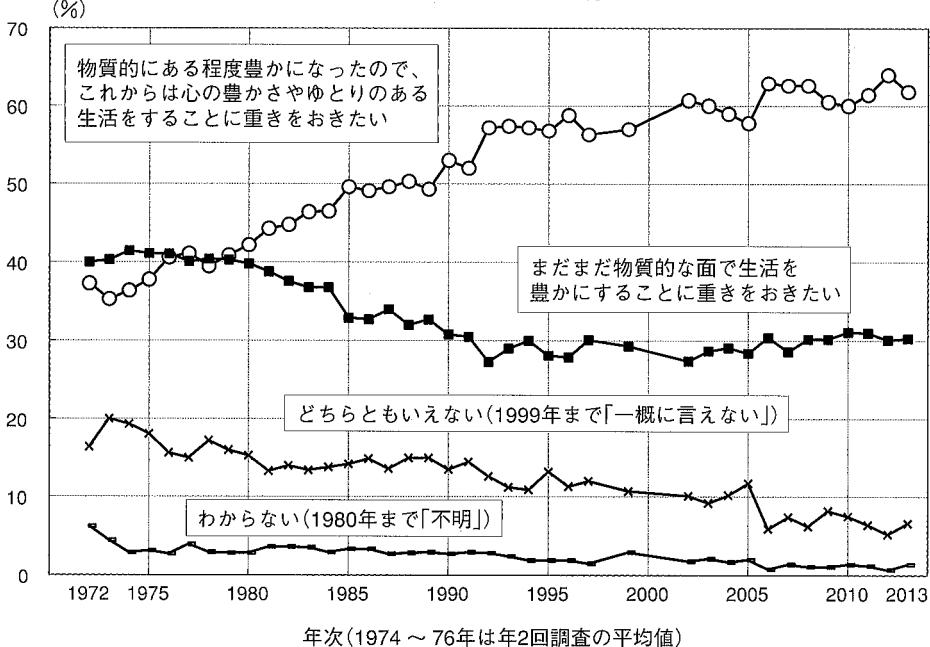
米国は、伝統的・宗教的な価値観が特徴ではあるが、大まかには右上方向を辿っており、2013年には最高裁が同性婚を認める判決を下したことなどからも、このことがうかがえる。

旧共産圏のロシアや社会主義的計画経済から

の改革開放を進めた中国は、共産主義の考え方が権威を失ったためであろうが、もともとは高かった世俗的・合理的な価値から旧式の伝統的な価値へとむしろ戻っている。非共産主義の儒教圏についても、韓国では、顕著な経済発展を実現したにもかかわらず、IMF危機の影響であろうが、2000年代に入って、左下の方向への大きな振り戻しが起こっている。台湾でも、韓国と同様に生存的価値へと振り戻しが起こっている。価値観が揺れているのは日本だけではないのである。

毎年行われる内閣府世論調査の結果の中から、イングルハート価値空間のX軸方向をう

図3 これからは心の豊かさか、まだ物の豊かさか



資料) 内閣府「国民生活に関する世論調査」

かがわせるような指標を探すと、図3が見つかった。この調査結果は、一般には、心の豊かさが優先されるように大きく変化してきた状況を示すために取り上げられることが多い。しかし、ここでは、むしろ、それが、2000年頃を境に、逆方向に転じる気配にある点が注目される。1990年前後にバブル経済が崩壊し、その後、失われた10年が20年となる中で、従来のように、「物質的なものは余り重要でない」という余裕が失われつつあると考えられる。この世論調査結果とパラレルに推移しているとすれば、今年にはホームページ上で公表が予定されている2010年のイングルハート価値空間における日本の位置は、再反転するには至っておらず、「脱亜入欧」の頓挫は長引いているといえよう。

*参考文献

- [1] Ronald Inglehart and W. E. Baker (2000) : "Modernization, Cultural Change, and the Persistence of Traditional Values" : American Sociological Review.
- [2] Ronald Inglehart and C. Welzel (2005) : "Modernization, Cultural Change and Democracy", Cambridge University Press.
- [3] UNDP (2011) : Human Development Report for the Russian Federation 'Modernization and Human Development' .

*「社会実情データ図録」関連図録

- [1] 図録9458「イングルハート価値空間における日本人の位置変化」